

---

# 雨、スズラン、少女

ばれん

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

雨、スズラン、少女

### 【Zコード】

N1402E

### 【作者名】

ばれん

### 【あらすじ】

彼女に出て行かれた男。病気の夫を持つ女。決意を持つ扉をくぐる少女。それぞれに悩みを抱えた三人。普通であれば交わることのない彼らの、一瞬の交差を書いてみました。

(前書き)

初めて「ひがり」で書かせていただきます。  
よろしくお願いします。

雨が降っている。商店街の外れにある喫茶店。男は窓際の席で外を見ていた。客は男ひとり。

手入れは行き届いているが、少し煙草の臭いの染み付いたソファー。角の装飾が剥がれてしまっているテーブル。ぼんやりとしたランプの傘には、一本だけ、蜘蛛が細く糸を張っていた。

この店オリジナルのブレンド。少し酸味がかつた味は店主の嗜好なのだろう。男には少し合わないようだ。

店内からは雨の音は聞こえない。その代わりに、聞こえるか聞こえないほどの音量で、異国のジャズが流れている。雨は、ただ何本もの透明な線を描いて、男の視界を斜めに過ぎていくだけだった。

男は買ったばかりの文庫本を取り出し、テーブルの上に置いた。だが、手に取るもの、読む気にはなれなかつたらしい。すぐにテーブルの上に戻した。

男は道の向こう側に目をやる。下ろされたシャツターの前に女がひとり立っていた。空を眺めながら、胸にスズランの鉢植えを抱えている。

三十代前半ぐらいだろうか。化粧をしてない顔は疲れているように見えた。時折、スズランの小さく白い花が、四月にしては少し冷たい風に揺れている。女はその鉢植えを抱え直した。

女は迷っていた。スズランの鉢植えを買ったものの、「鉢物は根付くという意味で忌み嫌われる」という古い風習の事が気になっていた。病室にこの鉢植えを持って行つていいものか、と。

女の夫は入院している。もう既に三ヶ月が過ぎていた。突然の昏倒。搬送。手術。入院。女は朝起きると、同じ事をぐるぐると考え続けている自分に気づく。それと、自分が看病に疲れ始めていることも。

スズランの鉢植えは夫の希望でもあった。スズランという花は、見た目の可憐さに反して、土の下は驚くほど強い。女も一度、庭に咲いているスズランの花を手で引き抜こうとしたが、その名を示す、鈴のような花びらを、無残に散らしただけだった。

夫はその強さに、自分の希望を置き換えていたのだ。女もその事には気づいていた。だが、進行性であるという医者の言葉が示す現実を、笑い飛ばすには、女も十分に歳を取っていた。

視線が下がる。女は最近、自分でも視線が下がり気味になることを自覚している。自分の弱気と夫の病気を振り払う想いを込めて、息を吐き出しつつ、視線を起した。

少女が立っている。きっと高校生だ。女がそれだとわかったのは、制服を着ていたからだ。この辺りでも、大学への高い進学率で有名な学校の、その制服を着た少女は唇を噛み締め、じっと通りの向こうの喫茶店を見ている。

少女は意を決したように歩き出す。白いソックスと、艶やかなふくらはぎが雨を跳ね上げる。緊張しているのが、少女の強張った背中から感じられた。

少女は迷っていた。心に重いものを抱えつつ、踏み出す足は今にもこの場から逃げ出してしまいそうだった。

「エンバー」 そう呼ばれる行為を、彼女は今から行おうとしている。喫茶店はその待ち合わせの場所だ。

相手の男は待っているのだろうか。暴力を振るつたりはしないのだろうか。今なら引き返せるのではないか。

少女の頭にいくつもの不安や後悔が浮かんでは消え、消えては浮かんでくる。だが、最後には級友の心無い一言が彼女の心を抉る。

時代遅れ。気持ち悪い。彼女の純潔に対し、口さがない級友たちは言った。少女はそれを偶然にも耳にしてしまった。

勉強にしろ運動にしろ、一生懸命やつてきた。お陰で、人に後ろ指を指されることもなかつた。だが、異性との付き合いにおいては、手を繋いだことすらなかつた。

男は少女を見ている。男の座る窓から、喫茶店のドアノブに手を掛けたまま、厳しい表情をした少女が立っている。少女はドアノブに掛けた白い自分の手をじつと見ながら、眉を彫らせていた。

男は椅子から体を起し、彼女を見つめる。だが、数秒見つめたかと思うと、直ぐに腰を下ろした。どうやら男が待つ相手ではなかつたらしい。男は自分の手のひらをじつと見つめていた。

男にはつきあっている女性がいた。会社の後輩。そして、今日、喧嘩をしたばかりだった。

男が彼女に近づいたのは、彼女がその同期入社の女の子の中で、一番、男性との距離の取り方が下手だったからだ。男はそこに興味を持った。下心がなかつたとは言えない。いや、あつたんだろう。そして、少し蔑んでいた。

あまりにも男と言つものを見知らない距離感は、逆にそこに空白とも思える、緩衝地帯を作り出す。そこには女でも男でもない立場の者は容易く降りることが出来る。男は教育担当といつ立場を利用した。

つきあいだして間もなく、男の浮気が発覚する。男は会社にある女性のネットワークを軽視していた。あらうことか、その相手は彼女の同期入社の女の子だった。それを叩撃され、女性社員の誰かが彼女の耳にそれを囁いた。

彼女はただ、男に事実を告げると、正座をしたまま涙を零し続けた。二人の間に流れる重い沈黙はやがて、男の理不尽な自尊心を傷つける。男もそれは間違いだと気づいていた。だが、傷つけられた自尊心は、男自身を守ることだけに働いた。

男は自分が一方的に悪いと知りながら、彼女に別れを打診する。彼女が別れるということ、その言葉すら忌み嫌つていてことを知つていたからだ。

何度も浮気をした。その度に同じ事を繰り返していた。今度もそうだと思っていた。

俯いていた彼女は、青白くなつた顔をつと上げる。微かに力を入れた、真一文字の唇の口角だけをふと揺らして、ありがとうと言

うと、後ろも振り向かずに男の部屋を出て行った。

女は少女を見ていた。道の向こうの喫茶店のドアノブに手を掛け、深刻そうな顔をしている。女は何故か少女に声を掛けたくなった。このスズランの鉢植えも見せたくなった。

女は通りを急いで渡り、少女に声を掛ける。だが、少女は気づかず、喫茶店の中に入つてしまつ。そのしつかりとした足取りは、決意に満ちているというよりもむしろ、戦場に赴く兵士のような勇ましさも感じた。

少女は喫茶店の中を見回す。店内に男は一人。一人はカウンターの向こう側。該当する人間は一人と言つことになる。

少女は男の前の、空いた椅子に座る。男が気づく。男が何かを言う前に、注文を聞きに来た店主にココアを注文する。

少女は早口で捲くしたてる。このココアはこつち持ち、ホテル代はそつち、料金は三万、嫌なら帰る、変な行為は許さない、と。

男はあっけに取られた顔で少女を見ている。少女は内心ほつとしていた。友人に教えて貰つた、主導権を握る方法を何度も練習したお陰だ。この男のバカみたいな顔を見れば、成功したことがわかる。下を向いていた男が話しうす。その方法は古い、まだ始めたばかりならば、行為自体をやめた方がいい、と。

少女は男の口から聞こえてくる内容を理解することが出来なかつた。この男は何を言つているのだろう? 主導権を握られて、自棄になつてゐるのではないか? と。

「ココアが運ばれてくる。少女はその液面を見つめたまま、動けずにいた。」その後はどうすれば……？

友人のアドバイスによるショミレーションには、この場面は想定されていなかつた。少女に残された方法は、この場を急いで立ち去るか、男の出方を待つしかなかつた。

女は喫茶店に入る。軽やかな音を奏でるはずのカウベルを、乱暴に響かせながら。店内を見回し、一組のカップルを直ぐに見つける。少女は顔を伏せている。男は頬杖をつき、通りを眺めていた。

女は教師をしていた。私立高校の臨時講師。比較的、時間に余裕があり、今日はスズランの鉢植えを、注文した花屋に受け取りに来ていた。

教師の勘。女には少女の決意が、なぜか見えたような気がしていた。女の勘。女には女が身を削るときの、独特の決意が見えたような気がしていた。

止めなければならない。女は咄嗟にそう思った。職業的な使命感とは違う何か。女は女自身が気づいていない、その身に宿る命に突き動かされていたのかもしれない。

男が人の気配に顔を上げる。すると、通りの向こうにいたはずの女が目の前に立つていた。見間違えかと思ったが、脇には鉢植えを抱えていた。

実は知り合いだった。その可能性を考慮し、男が女の顔を見る。だが、やはり見たことはない。それよりも、男を見つめる瞳は、全

ての感情を排し、ただ、慈しむためだけに存在するように感じた。

男はこの瞳を見たことがあった。この女ではない。『ういう瞳を持つ女を男は知っている。出て行ってしまった彼女だ。

男は気づく。上に立ち、彼女を軽んじていた自分。だが、その実、男の方が憐れまれていた。いや、それすらも通り越し、可哀想な自分が慈しんでくれる瞳であった、と。

少女は女を見る。誰だろう、この男の恋人なのか、自分はなぜここにいるのか、私は何をしているのだろう、と。

女は少女の前、男の隣に座り、話し始める。夫の病気。助からない命。自分でも何故この場所で、見知らぬ男と少女に、夫の話をしているのかわからない。だが、自分の口をついて出る言葉を、止める術を女は知らなかつた。

少女は次第に涙ぐみ、やがて声をあげて泣き出した。そして、目の前に座る男に純潔を売るにいたつた経緯を、涙を啜りながら話した。

男は一人の話を、通りを見るフリをして聞いていた。大事な人。大事なもの。守るべきもの。大切なものの。誰にでもある宝物。それを自分は気づけていなかつた。壊そうとしていた。やがて、男も泣いていた。

少女が突然、大声をあげた。男と女は驚き、少女の顔を見た。少女は目の前に座る男が、待ち合わせした相手と風貌が違うことを告げる。男はまさか自分が、渦中の相手と思われていたことを、今更ながら知る。女は自分の間違いに気づき、男にひたすら謝つた。

誰からともなく笑いが零れる。そして、その内、三人は大笑いしていた。

その時だった。雨に濡れた春物の薄手のコートを来た男が、袖をハンカチで拭きつつ、店内に入ってきた。少女は小さく声をあげる。女が立とうとするのを男が制し、コートの男に近づこうとした、その時だった。

注文を受けた店主が、その注文を拒否する。そして、何が起つたのかわからずにいるコートの男に、この店は援助交際お断りと、大声を叩きつける。

スツールに座りかけた男は、そのまま滑るように降りると、闘牛のように肩を怒らせて、カウベルを鳴らして店を出て行った。

店主から三杯のコーヒーが運ばれてくる。祝杯と言つことだらうか。三人は顔を見合させ、カップを手に取り、コーヒーで乾杯した。

「ちょっと酸味が……」  
「すっぱい……」  
「うげえ……にがひ……」

三人の声が揃う。それを見た店主は、にっこりと微笑みながら、何度も何度も頷いていた。

外に出ると、雨はやんでいた。湿気を含んだ暖かな空気が、頬を撫でていく。三人は、商店街の終わりに来ると、それぞれの道を歩いて行つた。

彼女の元へ。夫の元へ。家族の元へ。大事な場所へと。

商店街の外れにある喫茶店。オリジナルのブレンドは今日も酸っぱい。

<了>

(後書き)

三人称を書いたことがありませんでしたので、練習のつもりで書いてみました。

拙い文章を読んでいただき、ありがとうございました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1402e/>

---

雨、スズラン、少女

2011年1月16日08時45分発行